

陳舜臣さんを語る会通信

NO.3 Apr. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年4月15日

終戦直後の台湾社会が舞台、『怒りの菩薩』

本号では、『怒りの菩薩』（1962年 桃源社）を取り上げました。陳舜臣さんの小説で、台湾が舞台になっているものは極端に少ない。特に、終戦直後の台湾を舞台にした小説は、ほかにあるのだろうか。少ない理由について考えるのも興味深いことですが、それは別の機会とし、ここでは、この作品を紹介するだけにとどめます。『怒りの菩薩』は、前年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞した陳舜臣さんの最初期の作品です。『枯草の根』のあと、書き下ろしでは、『三色の家』『弓の部屋』『怒りの菩薩』と続きます。この時期、書き下ろしではありませんが、ほかに1冊、『方壺園』があります。

（編集委員 橘 雄三）

《1. 登場人物&あらすじ》

おもな登場人物を下にあげましたので、まず、目を通して下さい。

プロローグです。終戦直後、日本の植民地支配から解放されたばかりの台北の町で一つの殺人事件が起こります。

それから半年後、いよいよ主人公の登場です。1946年春、主人公楊輝銘が、新妻林彩琴を伴って台湾へ帰って来ます。

楊輝銘と林彩琴が彩琴の実家を訪れると、その前夜、第2の殺人事件が起こっていました。

そして、この、実家訪問中に、大陸へ行き既に亡くなったと思われていた林景維が戻ってきます。



集英社文庫の表紙

ところが、あろうことか、林景維は翌日、近くの菩薩山で死体となって発見されます。3つ目の殺人事件です。菩薩山では、警備司令部将校の指揮の下、地元の警官、村の若い衆、送還待機中の旧日本軍の部隊まで動員されて山狩りが行われます。

あと、林景維殺人事件の背景と犯人捜しを中心にストーリーは展開します。

これ以上、推理小説のあらすじを書き進めるのは野暮ですので、このあたりまでとしておきましょう。

《2. 政治的背景—3つの殺人事件の根—》

作品中、作者は陸宙に、「この三つの殺人事件には、一本の筋が通っている！」と語らせます。

日中戦争期の重慶国民政府での出来事、つまり、独裁色の強い蒋介石からの汪兆銘の離反が背景にあることがわかってきます。汪兆銘は、中国にあっては、日本と通じた「漢奸」、「売国奴」と評判がよい政治家です。「一本の筋」、つまり、第1殺人事件の被害者の『投汪』（汪兆銘政権への寝返り）の事実と、更に第2、第3殺人事件被害者の第1殺人事件との関連です。

このあたり、次ページの「大陸・台湾の政治状況」を参照願います。



TVドラマ『憤怒的菩薩』の一シーン
戦後、菩薩山の通り 国軍を称える幟

登場人物	
楊輝銘	日本に留学、大学卒業後、日本で就職。終戦の翌月に結婚し、半年が過ぎたばかり。1946年春、新妻林彩琴を伴って台北に帰郷
林彩琴	台北からバスで20分ほどのところ、菩薩山の大地主、林家の娘。楊輝銘の妻。日本に留学、女専を卒業
林珠英	林彩琴の姉
林景維	林家の長男、彩琴の兄。東京に留学、その後、日本の植民地統治に反抗して、陸宙と語らって大陸へ。両親は、陸宙がそのかしたと思っている
陸宙	陸家の長男
陸枢堂	陸家当主。陸家は、代々地主で、「書院」を経営する。名望家
陸杏	陸宙の妹。林彩琴の親友
崔上校	事件を捜査する警備司令部の将校
葉中校	事件を捜査する警備司令部の将校。崔上校の部下

陳舜臣『怒りの菩薩』（続）

前頁で、終戦前後の大陸・台湾の政治状況に言及しましたが、これに関し、下の表、「大陸・台湾の政治状況」を参照願います。ここでは、『怒りの菩薩』で、終戦前後の台湾社会がどのように描かれているかを見ていきます。

《3. 終戦前後の台湾社会の描写》

(1) ■「国民党批判」と受け取れる箇所

『通信』第2号で取り上げた『タイワニーズ』で、著者野嶋剛氏は「陳舜臣には1962年に発表された『怒りの菩薩』という著書があり、はっきりと台湾における国民党の民衆弾圧に言及している」と述べています。しかし、それほどの記述は見当たらないのですが、一応、終戦前後の台湾社会を描いて、「国民党批判」と受け取れる箇所を抜き出してみました。

①まず、プロローグ。殺人事件の導入で、大陸からやってきた軍隊を「やがて重慶の要員が飛行機で到着しはじめ、『国軍』の将兵が上陸してきた。天秤棒をかついだみすぼらしい兵隊たち…」と表現しています。

②陳舜臣さんは、戦後、1946年春、「帰郷」しま

すが、『怒りの菩薩』の主人公楊輝銘が新妻林彩琴を伴って台湾へ戻るのも、同じ1946年春です。基隆の港で、露天商が楊輝銘に、「一匹の犬去り、一匹の豚来たるでさ」と話しかけます。この程度のことは普通に言われていたと思うのですが、1960年代、戒厳令下の台湾社会では許容範囲を超えていたのでしょうか。

③そして、陳舜臣さんが、「ただ銃声を聞いていたというのは口惜しいことであった。その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えていくことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている」と『道半ば』に記した二・二八事件はまだ起こっていませんし…。

(2) ■布袋戲（プータイシ）

台湾社会において、村々を回って、野外で上演する布袋戲は人々の生活の一部になっていました。

楊輝銘が実家にもどり、近くの廟の広場でやっている布袋戲を見に行くくんだり、『怒りの菩薩』では、かなり長く布袋戲についてふれています。

布袋戲については、侯孝賢監督の『戲夢人生』で主人公の李天禄（台湾を代表する人形使い）は、作品中、「盧溝橋事件がおきた。日本政府が長谷川清を総督に任命して台湾を治めさせたのは、盧溝橋事件の3年後だ。野外の芝居は禁止になった。台湾の演劇界で布袋戲をやる人とその家族は数万人。彼らの苦労は大変だった。この時期、私は舞台の演出の仕事をした」と語っています。

また、同じ時期、これも『戲夢人生』中の一コマですが、下の画像のように、布袋戲も戦争プロパガンダに協力させられています。

『怒りの菩薩』で陳舜臣さんが記述しているようなこともあり、『戲夢人生』で描かれているようなこともいろいろあったのでしょう。



映画『戲夢人生』の一シーン

山人人への戦争プロパガンダ 台北州文山郡米英撃滅推進隊

	大陸・台湾の政治状況
1895	日清戦争の講和条約、下関条約に基づいて、清朝は台湾を日本に割譲
1937	7月、盧溝橋事件。12月、日本軍、南京侵攻。国民政府（蒋介石）、重慶へ
1938	12月、汪兆銘重慶脱出。ハノイへ
1940	3月、南京国民政府（汪兆銘政権）樹立 11月、日本、この政権を承認 [台湾] 改姓名はじまる
1941	[台湾] 皇民化推進の「皇民奉公会」発足
1942	[台湾] 最初の台湾人志願兵入隊
1943	[台湾] 六年制義務教育実施
1944	[台湾] 台湾人に対する徴兵制実施
1945	第二次世界大戦終了、日本降伏 [台湾] 光復。10月、国民党政権の部隊と台湾省行政長官公署の人員到着。台湾人の国籍、中華民国に
1946	[陳舜臣] 呉港から帰国船に乗り、3月初旬、基隆に上陸。弟・本臣が継ぐ本家（父の従弟の家）に身を寄せる。新設、台北県立新莊初級中学の英語の先生にと懇願され、1949年10月の帰国時まで勤める
1947	[台湾] 二・二八事件勃発。以降、国民政府による白色テロが頻発する
1949	[台湾] 国共内戦で崩壊状態にある国民政府（重慶）を台北市へ移転（遷都）し、実行統治区域内で戒厳令施行

《4. 陳舜臣さんが言う「台湾人の漢族意識」》

『怒りの菩薩』中で、陳舜臣さんは次のように記しています。

「日本統治の50年間、台湾人は大陸から隔離されていたといつてよい。戦時中の『皇民化運動』は、統治者が台湾人の漢族意識を破壊しようと、はっきり意図したものだった。それにもかかわらず、『皇民化運動』は、台湾人の日本人化に失敗した。漢族意識だけは、台湾人の胸から剥奪できなかったのだ。

（中略）中国の版図に復した台湾人は、新しい不幸を背負った。50年の隔離によって、大陸とのつながりが、『漢族意識』という、ぎりぎりのものしかなかったことだ。」

私は、『怒りの菩薩』のこの記述を読んで、侯孝賢の『悲情城市』の一コマ(右の画像)が浮かびました。酒場で議論していたインテリ青年たちが、窓外から聞こえてくる「我家在松花江那邊」に唱和するシー

ンです。歌詞は北京語で、「九・一八、九・一八、あの悲惨な日から家や故郷を離れ」という柳条湖事件にはじまる日中戦争の苦しみをもったものです。当時、こんな歌を唱和できる台湾人がどれだけいたか疑問でした。のち、『悲情城市』のこのシーンは、台湾社会でも問題になったと聞き、納得しました。

『漢族意識』を持って戦後を再出発した台湾人がどれだけいたか、おそらく、陳舜臣さんはそんなお一人なのでしょうが、疑問に思います。



陳舜臣『怒りの菩薩』 2018年、台湾でテレビドラマ化

『怒りの菩薩』は2018年、台湾でテレビドラマ化され、公共テレビ（公視）で、『憤怒的菩薩』と題し、1話60分、全4話で構成、8月18日に第1話と第2話、25日に第3話と第4話が放映されました。原作と一番ちがうのは、主役が陶展文になっていることです。そして、楊輝銘と林彩琴は婚約者という設定です。

メガホンをとった許肇仁監督は、「同作を通じて戦後の台湾に対するステレオタイプを覆したかった。戦後は悲しみに包まれていた印象があるものの、当時の人々は自分が悲しいかを考えていたわけではなく、自分のやり方で日常生活を送っていただけ。（同作について）遠巻きに見れば喜劇、近くで見れば悲劇」と語っています。

ユーチューブでおおよその内容はわかります。覗いてみてください。



原作には登場しない陶展文 映画では主役



光復後の菩薩庄 字幕「私たちは公明正大、中国人になった」「ところで、『中国人』になるってどうなること？」



林思宇 飾 林彩琴

林家の次女林彩琴。TVドラマでは楊輝銘の婚約者



山狩りの村人たち
中央、楊輝銘

陳舜臣さんの引っ越し歴

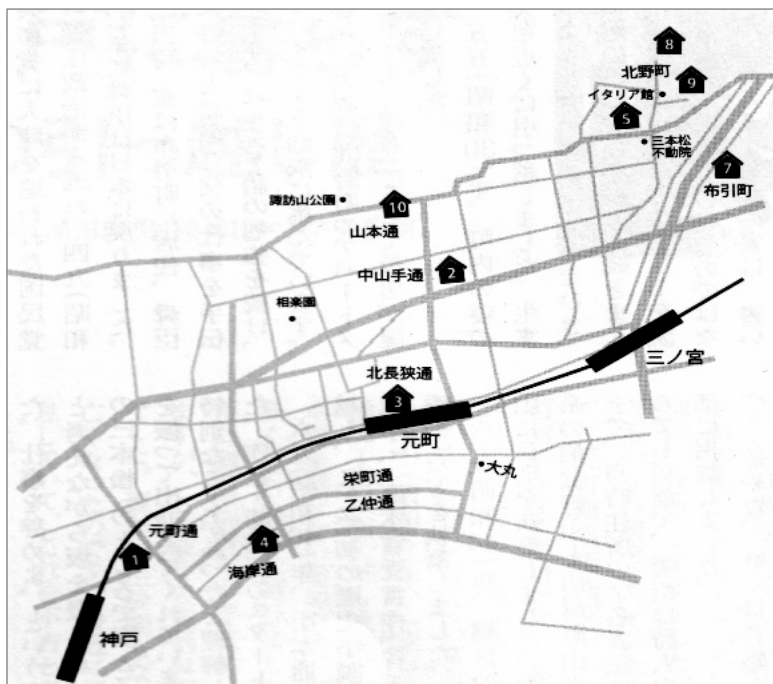
陳舜臣さんには11回の転居歴があります。その転居を詳しく辿るのは一つの研究テーマになるかもしれません。でも、ここでは、その事実だけを一覧表形式で下にあげました。備考欄も併せ、ご高覧願います。

表の作成は前田康男さんです。前田さんは、「陳舜臣アジア文藝館」の開館準備に一緒に汗を流した仲間で、大の陳舜臣ファンです。

右の転居歴の地図は、(株)くとうてんの許可を得て、『ほんまに』vol.17 から転載させていただきます。

■なお、右の地図にない住所について補足します。引っ越し歴、**通し番号6**はJR垂水駅の東を流れている福田川中流右岸、**通し番号11**は阪急六甲駅北方、六甲学院正門前、**通し番号12**はJR住吉駅の北東、住吉川左岸沿いです。

(編集委員 橘雄三)



陳舜臣さんの引っ越し歴と神戸を舞台にした推理小説

	西暦	年齢	住 所	備 考
1	1924	0	元町通7丁目	三越百貨店のそば(白鶴の酒蔵の裏)で生誕
2	1930	6	中山手通3丁目	華僑が多く「広東村」と呼ばれた一帯
3	1931	7	北長狭通4丁目	諏訪山小学校2年生
4	1934	10	海岸通5丁目	「三色の家」のモデルとなった家。父が「泰安公司」創業
5	1944	20	北野町1丁目	疎開。この時期、後の奥様と知り合う
6	1945	21	垂水区御霊町	空襲により海岸通の家が焼失。北野の家も危くなり垂水へ転居
	1946	22	台湾へ	台北県立新莊初級中学校教師
	1949	25	台湾より帰国	家業に従事
7	1950	26	布引町2-3-19	結婚後の新居、陳家の実家
8	1951	27	北野町1-17(当時の表示)	1952年、長男立人氏誕生
9	1955	31	北野町1-31(当時の表示)	1957年、長女由果氏誕生 1961年に「枯草の根」(江戸川乱歩賞作)で文壇デビュー その後、「三色の家」(1962)、「弓の部屋」(1962)、「くたびれた縄」、「ひきずった縄」、「縄の繃帯」(いずれも1962)、「割れる」(1962)、「天の上の天」(1963)、「まだ終わらない」(1964)、「白い泥」(1964)、など神戸を舞台とした初期作品をここで執筆 デビュー作・「枯草の根」で登場した名探偵・陶展文は「三色の家」、「割れる」及び縄3部作にも登場、陶展文の自宅も作品中でこの北野の旧居となっている。この旧居は言わば陳舜臣作品の原点ともいべき場所である 左の写真、当時のままの門扉。通称「イタリア館」の裏手
10	1965	41	山本通4-72-16	この時代に、神戸を舞台とした「炎に絵を」、「孔雀の道」、「幻の百花双瞳」、「他人の鍵」、「六甲山心中」といった作品を発表 「青玉獅子香炉」で1968年下半年期直木賞受賞
11	1969	45	灘区篠原伯母野山町3-1-14	六甲山房と名付けられた六甲山麓の新築住宅に転居。神戸を舞台とした作品は、「虹の舞台」、「柊の館」、「燃える水柱」、「夏の海の水葬」(文庫本では「神戸異人館事件帖」と改題)、「異人館周辺」、「夢ざめの坂」、「三本松伝説」などがこの時代に執筆されている。「虹の舞台」では久しぶりに陶展文も登場
12	1998	74	東灘区西岡本2-7-2	西岡本に転居されてからは、推理小説の執筆はない
	2015	90		ご逝去

注 ■ 中国歴史物の最初の作品「阿片戦争」は、1967年に山本通の居宅で書かれているが、それ以外の中国歴史物は殆どが伯母野山以降の発表である。